GAKUNAVI ガクナビ

2020.03
Spring

N-BOX

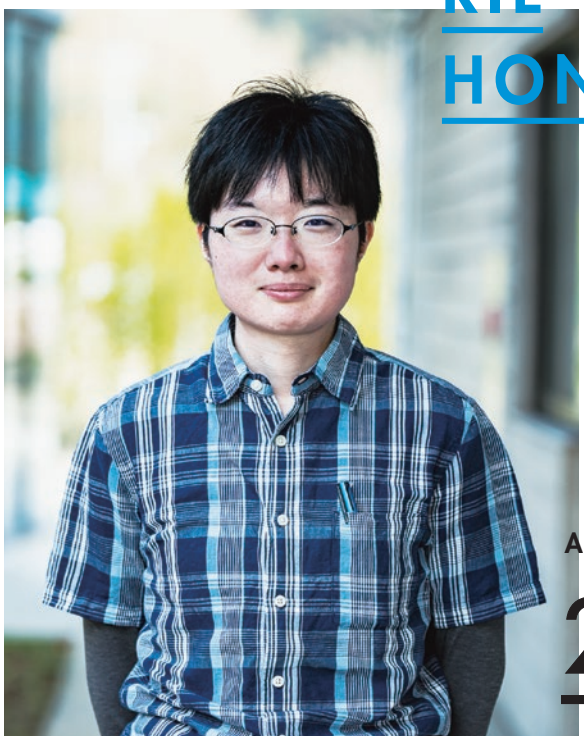
マラソン

今号の表紙

本多理恵さんの6つのこと

杜の家なりた
生活支援課 ユニットリーダー

ゲーム



RIE HONDA

AGE 27

ケアコラボ

ボランティア

青色

1月に初めて車を買いました。それまでは母から譲り受けたHonda車に乗っていて、同じ「Nシリーズ」がほしくて、この「**N-BOX**」にしました。子どもの頃から**青色**ばかりで、車も、布団やカーテンも、仕事着も、メモやペンやポーチなども基本的に全部、青いです。利用者さんが服の色柄で覚えてくれることもあります（笑）。

走るのが好きで、中学・高校は陸上部で短距離走、大学から**マラソン**を始めたんですが、入職後はフルマラソンを一度も完走できていなくて、そろそろジョギングする習慣をつけたい。でも家だと**ゲーム**に夢中で……なかなか難しい（笑）。大学時代は手話メインの**ボランティア**サークルで活動していて、今もときどき顔を出したりしています。

ただ、もともとすごく人見知りで、人間関係があまり得意ではないんです。陸上部に入ったのは「個人競技だから」という理由もあって。介護の仕事にあんまり向かないタイプですよね……。入職当初は、ユニットのメンバーに助けられながら、利用者さんと毎日一緒に過ごすうちに少しずつ慣れていった感じです。今は自分の役割もあるので、新しいメンバーには自分から声をかけて、早く打ち解けられるようにしている……つもりです（笑）。

最近は、**ケアコラボ**の記録の仕方を工夫しています。職員もご家族もわかりやすくイメージできるように、利用者さんの言葉もなるべくそのまま「～だっぺよ」と方言まで入れて。状況を詳しく書こうとして、ついつい長くなっちゃいます（笑）。

日本語能力試験の「N1」を取得して リーダーをやってみたい！！

2015年8月に「日本・ベトナム経済連携協定（EPA）」によって来日したブイ・バン・チュオンさん（28歳）は、「杜の家くりもと」の介護職員として入職して5年目になる。介護福祉士国家試験にはストレートで合格した。

チュオンさんがEPAを申し込んだ理由は、日本の給与が高いということだけではない。「ベトナムでは、家族の介護は家族が行うことが多いけど、最近は働く人が増えたから施設での介護が増えています。日本のような介護の制度や資格はないし、先のことはまだわからないけど、日本での経験は役に立つと思いました」と、ベトナムの現状を見据えて日本にやってきた。

ベトナムでは看護師として働いていたこともあり、介護の仕事にはすぐ慣れた。だが、入職後に間もなく自然に死にゆく人を看取ったときのことは今でもよく覚えているという。「はじめは寝ているのかと思ったけど、声をかけたら胸が動いていなくて驚きました。（ベトナムの）病院で働いているときは、モニターでその人の状態を確認できたから、気持ちの準備もできた。でも、自然に死んでゆく人の経験がなかったので焦りました」と当時の心境を語る。そんな経験もあって、今では後輩職員に利用者一人ひとりの状態を詳しく伝えることを大切にしている。

これからについてチュオンさんに聞いてみた。「もう少し日本で働き続けたいと考えています。機会があればリーダーもやってみたいですね。日本語はまだわからないことが多いし、介護の知識もまだ足りない。自分の考えていることをもっと相手に話せたり、他の人の考えを聞けたりするようになりたいです。まずは、日本語能力試験で『N1（最高レベル）』を目指します」と、謙虚ながらも目標は高い。これからの介護現場は外国人介護職員がますます増えていく。そんななか、リーダーを担う存在が出てくることは頼もしく感じた。

text : KYUKO Hirotaka

テイラー・スウィフトの曲が好き 坂本イワ子さんインタビュー

2018年11月から「福祉楽団 地域ケアよしかわ」がケアマネージャーを担当し、2019年3月にお亡くなりになった坂本和雄様（享年80歳）。その奥様で、現在「子ども食堂（通称：みんなの食堂）」のボランティアをしている坂本イワ子さんに話を伺った。

和雄様は定年退職後、徐々に家に引きこもりがちになり、医師からはうつ病の傾向があると言われていた。精神状態は不安定で、警察のお世話になるようなことも一度や二度ではなかった。しかしご本人が頑なに病院に行くことを拒否していたので、2018年にレビー小体型認知症と診断されるまでの10年以上もの間、専門職の援助を受けずにイワ子さんがひとりで介護を行っていた。「要介護認定を申請することは、夫のためではなく自分が楽になろうとしているだけじゃないかという葛藤があった」と当時を振り返る。だが、ケアマネージャーや訪問介護職員、看護師の人たちを頼っていいんだと思えたことで気持ちが軽くなった。

「夫がいなくなってからは、自由と孤独です」と語るイワ子さん。子ども食堂に「ただいま～！」と元気よく入ってくる子どもたちを「おかえり～」と迎え入れ、みんなと話している姿からは、その自由と孤独を楽しんでいるように見える。

子ども食堂の運営をする福澤さん（右）と坂本さん（左）

お話を伺ったお部屋からは、テイラー・スウィフトのポップミュージックが流れていた。「こんな曲聴いているおばあさんはなかなかいないでしょう。エド・シーランも好きなの」と、好きな音楽をいつでも聴けるようになった喜びを教えてくれた。

text : ISHIMA Taro

PROJECT

「1K Good Neighbors Jam & Paste」のジャムで日常に楽しい彩りを！

「恋する豚研究所」の敷地内にある「1K sweet potato」のサツマイモ畑を挟んだ隣に、新たに「ジャム加工棟」を建設している。2020年3月末に完成する予定だ。

香取市の栗源地域にはサツマイモをはじめ、ジャガイモ、イチゴ、ナシ、オレンジ、キウイ、クリなど、くだものや野菜の生産が盛んだ。店頭には形の良い商品の数々が並ぶ一方で、世の中に出回らないものもある。近隣のイチゴ農家さんは「旬の終わり頃になると、形がいびつだったり色が黒ずんでいたりする“規格外品”がどうしても出てくる。見た目は悪くても、味は美味しいのに。家で食べたり人にあげたりしても余ってしまうので、摘んでくれるなら持って行って欲しいくらい」と肩を落とす。

そのように、地域にあるくだものや野菜の“規格外品”を有効活用したいという想いから始まったのが、このプロジェクト。ジャムやペーストは製造と販売が異なる場所で行われることが多いが、私たちは製造過程を見てもらいながら販売もするのが特徴だ。また、収穫や下処理、加熱、包装などの製造工程を分解してマニュアル化することで、働きづらさを抱えた人たちの仕事もつくっていく。

ジャムやペーストにあまりなじみの無い人も多いかもしれないが、毎朝のパンに塗るなど、それらがあることで何気無い日常に楽しい彩りがプラスされる気がする。素材の味を大切にし、栗源地域の良さが詰まった商品にするべく、今はイチゴジャムとジャガイモペーストの試作を進めている。

※「1K Good Neighbors Jam & Paste」のオープンを機に、スイートポテトの店名も「1K sweet potato」から「1K Good Neighbors Potato & Café」に変更になります。

text : MATSUMOTO Yuri

REPORT

シアトル発 支援の在り方とマイノリティについて考える

自宅の庭で遊んだ後にベンチでおしゃべりする西山さん（左）と諒さん（右）。

3社福アライアンスで職員をひとりずつ出して実施したシアトルでの福祉実践研修。福祉楽団からは栗源事業部の西山啓介さん（30歳）が参加した。発端はシアトルで暮らす早川さんからの相談だった。「強度行動障害を伴う自閉症の諒さん（24歳）は、日中の活動場所がなく、母親が付きっきりで介護している。介護疲れもあるので何とかならないだろうか」というもの。

アメリカでは個別障害者教育法（IDEA法）により、21歳までは手厚いサポートがあるが、それ以降のサポートは極端に少なくなる。諒さんは出かける場所がなく一日じゅう家にいる。若者が力まかせにふるまえば、リビングのガラスにもヒビが入る。部屋の中央には行動エリアを制限するための柵が設置されていた。食事はその柵越しに家族の介助が必要だった。

西山さんたちが来てからは毎日外出し、自転車で遊んだり軽作業をするなど、できそうなことはどんどんやってもらった。研修が終わる頃、諒さんは椅子に座って自分で食事ができるようになっていた。これは10年ぶりのことだったという。西山さんにとってこの経験は、「相手に寄り添い 持てる力を引き出し それを高める援助」を実感できた出来事だった。

研修には「自分がマイノリティの状況を体験する」というテーマもあった。自分は“日本人”であり、英語ができないことが“マイノリティ”になる。その体験も貴重だったに違いない。「やろうと思っていたことは大体できた」と言う西山さん。彼が体験したことを、これからの日本の福祉にも活かしてほしいと期待している。

text : YAMANE Masanori

COVER STORY

杜の家なりた 施設福祉サービス部
生活支援課 ユニットリーダー

本多理恵さん

人間関係は慣れるまで時間がかかるが、慣れてしまえばその人との関係を大切にするという本多さん。丁寧なケアはユニットのお手本になっている。5年後にどうなっていたいかを尋ねると「いまと変わらず、メンバーや利用者さんと穏やかに過ごしていたい」と語る。朝は牛乳を飲み仕事中はスポーツドリンクと決めていて、お茶やお酒は飲まないという。身の回りのものは一貫して青色だ。そのブレない行動はきっと5年後の想いにつながると感じた。

text : HARADA Takayuki

VOICE

ご利用者やご家族などからハガキやメールなどで寄せられた「声」に対して、職員がお答えします。

ご意見

［特別養護老人ホーム］

入院中に母の部屋をショートステイとして使用することは了承しましたが、使用する際に連絡がありませんでした。期間も分からず不安でした。

お答えします

古畑（こばた） 佑奈（ゆうな）
杜の家やしお
施設福祉サービス部　生活支援課　課長

配慮が行き届かずにご心配をおかけしましたこと、深くお詫び申し上げます。居室をショートステイで利用させていただく際は、事前に利用開始日や利用予定日数をお伝えするように改善いたします。

ご意見

［特別養護老人ホーム］

母の怪我に対し、真摯に原因の予測と対策検討を行ってくださり、誠にありがとうございました。これからもよろしくお願い致します。

お答えします

宮澤（みやざわ） 博臣（ひろおみ）
杜の家なりた
施設福祉サービス部　生活支援課　ユニットリーダー

お怪我をされたことにより、ご心配をお掛けいたしました。事故発生時は、専門職が協働して原因と再発防止策を検討しています。これからもご本人にとって最適な生活を考え、支えていきたいと思います。

※掲載しているご意見の内容は個人情報の保護の観点から編集をしています。

TOPICS

01 重要 新型コロナウィルス対策

2月24日付の厚生労働省からの指導により、福祉楽団の施設においても来訪や面会を制限しています。
当面の間、以下の対策を実施いたします。

1）不要不急の面会はお控えください。
2）施設に立ち入るすべての人に体温チェックをしています。
　発熱者は立ち入りを禁止します。
3）風邪症状がある人は施設への立ち入りを禁止します。
4）解熱後3日を経過するまでの間にある人の施設への立ち入りを禁止します。
5）施設に入る場合は、必ず手洗い、うがい、手指消毒、マスクの着用をお願いします。
　マスクは、施設の入り口にある新品のものを着用してください。自宅や外部で着用してきたマスクを施設に持ち込まないでください。

入居者等で発熱された場合や、感染疑いがある場合は、居室を変更したり、通常の介護が提供できない場合があります。職員や入居者は健康状態を確認した上で、マスクの着用は任意としています。ですから、マスクを着用していない職員や入居者がいますので予めご了解ください。
みなさまのご理解とご協力をお願いします。

02 2019年台風15号等被害の復旧状況

福祉楽団の被害総額は1億189万円となりました。現在、「杜の家くりもと」「杜の家やしお」「恋する豚研究所」では自家発電装置が故障し使用できない状態となっています。大型発電機の納期に時間がかかる見込みで、2020年8月末までの復旧を目指しています。また、台風災害の教訓を未来に活かすために検証レポートを制作しています。2020年4月上旬に発行の予定です。

03 千葉県・神崎町長から感謝状

台風15号による災害時の戸別訪問による安否確認、非常用食糧の提供などの活動について、1月22日に千葉県の神崎町長より感謝状を授与されました。

04 雑誌『POPEYE』で「福祉のしごと」特集

2月7日発売の雑誌『POPEYE』（マガジンハウス）で「福祉のしごとって?」が特集されました。福祉楽団ではこの企画の一部を担当しました。

発行：社会福祉法人 福祉楽団　発行責任者：理事長 飯田大輔　tel : 043-307-2828　fax : 043-307-4848
表紙写真：間部百合　デザイン：TAKAIYAMA inc.　編集：コッペル